

## 魅力ある寺を思う

三田村 龍 全

キリスト教徒で、無教会主義を唱導したことで有名な内村鑑三氏は「信仰日記」（大正八年初版）の中で「一生の間決して教会堂を有つまいと決心した。教会を有ちて余の信仰は固結せざるを得ない。信仰は自由にして流動的ならざるべからずである。故に教会は信仰の大なる妨害である。故に大宗教家はすべて寺とも教会をも有たなかつた、法然、親鸞、日蓮すべて然りである」と述べている。また「若し我が教会ありとすれば其れは木の蔭である。或は碧空の下の緑野である。」また「……教会は異端俗化腐敗の培養地である。」、或は「宗教は素々深き情

であり詩であり歌である。是が教会と変じ神学と化するときに最も忌むべき者となるのである。」と述べ、教会、宗教会は「是れ実に『盗賊の巢』である」とも極言している。仏教についても、このような事例によつて、仏教の忌むべき姿を難詰批難している。やや長いが引用しておこう。

「古崎彊君昨日眠りし由遺族より電報があつた。然し葬儀は仏式を以て行ふ由、実に奇怪千万である。彼は明白なる基督教の信仰を以て死し、且つ彼の葬儀の今井館に於て彼の信仰に順じて行なわれん事を遺言した。然るに之を省みずして彼、死して後二

十四時間、仏式を以て彼の遺骸を葬りしと云う、非常識も亦甚だしいと謂うべきである。然れども死者をして死者を葬らしめよである。基督信者に其生ける靈魂を救はしめて其死せる體を葬りし仏教徒の心事の憐れさよ、家は常に仏教に対しては厚き尊敬を払い来りし者であるが、今回古崎君の遺骸に対する彼等の処置をみて『仏教滅亡』を叫ばざるを得ない、今や日本の仏教徒は生ける靈魂を救い得ずして死せる肉体を争うのである。寺は今や「葬儀会社として在るに過ぎない。憐むべきは仏教の末路なる哉」(傍点は筆者)

私は去る十月七日、東京私学会館で行なわれた、「第三回京浜宗務区教化研究会議」第一分科会に出席し、参別者の発言や提言を聞きながら、私の心は内村鑑三をしきりに思はざるを得なかつた。

内村氏は教会或は宗教教会を「盗賊の巢」と叱咤した。日蓮聖人は「畜盜法師」ときびしい警告を遺されている。

今の寺院住職は、まずそこから出発して、自己批

判の前に裸にならなくてはなるまいと痛切に思うのである。かく言う私もその一人である。他を省みて自からを言うたされてはいるが、寺院、仏教を思う時、クレイゴとではすまされない。現実のきびしい批判的反省と、当来社会への歴史的な展望を背景とした評価がなされなければならぬであろう。

そこには情緒的な希望的な観測では許されぬ冷徹な現実が白い目をむいて立ち向つて来るかもしれな

い。

現在の寺院は一面から言えば仏教の名に於て存在する建造物にすぎないとも言ひ得る。しかも数千の檀信徒をようして、葬儀と法事と行事に追いまくられている大寺もあれば、無檀無収入で生活不能の小寺もある。住職は名のみで、他に職を求め、生活を維持している境遇もある。正に宗団(教団)は階級の構造をかかえて、有力寺院の権勢によって支配され、その対面をささえているの感なきを得ない。しかも優等寺院の世襲的継承によって、下級寺院の子弟は、蛙の子は蛙のまま「出世」の展望は、はばまれてはいる。従つて夢もロマンもなく与えられた寺

というものの維持に男の一生をささげて終りをまつのである。三十年程前にアメリカで「青年の書」が発刊されたが、(私の書庫のどこかにあるのだが見つからない)その中で宗教は青年にとつて絶望であるという意味のことが書かれていたのが、妙に私の脳裏に残っている。

正に寺院の存在そのものが「末法」的であると言わざるを得ない。

日本は平和ムードの中にある。しかし久しい以前から私は「乱世」であると感じとり主張もしている。日本のみではなく、世界の人類は滅亡の破局に向っているのではないだろうか。日本沈没どころではなく、地球的規模の危機が足下にせまっていると私は思はれてならない。地球上に武器をばらまき、戦争を挑発激化することによつて栄えている国もある。武器弾薬を売らなければ失業者があふれるであろう。「死の商人」によつて国家の経済がささえられている国もある。戦乱で火事場泥棒のように肥つて来た日本のような国もある。

社会機構は資本主義から新しき社会機構への転移

がはじまり進んでいることは歴史が現に証明している。福祉国家などとセンチメンタルな考え方で、歴史の展望は出来ないであろう。社会福祉はその社会機構の中で人道的行政の一面なのである。

日蓮聖人が「夫れ佛法を学せん法は必ず先づ時をならうべし」(撰時抄)と言われたことは歴史哲學的テーマとして適切かつ重大である。「立正安国論」もその具体化である。

現代は、寺そのものの存在理由を問われていると同時に僧侶像の近代的な在り方はどうあるべきかの反省が求められている。

しかし、寺院生活には、一般的に一種の特権階級的恩恵があり、そこに安住する寺族は、とにもかくにも生きていかれる安逸がひそんでいる。中産階級の寺院は、タコソポのようにそこに定着しつつ、僧侶の空しい自己満足的な虚名に誇りを保ちつつ、美麗な法衣に身を飾り、社会的体面を維持し、伝統的習慣の上に安座しているかのようである。

そこに、社会の公的機関として寺は生きてゐるの

である。寺は亡びそうで亡びない強固な歴史的伝習の盤根の根を張っている。

私は境内に墓碑が建立される時いつも合掌したい気持ちになる。彼等石工等は重い石を職人同志の力を合わせて、かつぎ、はこび、汗で全身をぬらし、重たさで腰骨が折れるような苦闘に耐えている。そして日当一万円なのである。全身一路の一万円なのである。それに比べて僧侶の受ける布施は、何と輕易な労働であろうか。勿論それは価値基準によつて評価は色々あるが、労働量から考えれば、もつたいななことである。「無量の珍宝を以て布施するも誦經一偈の功に及ばず」という了解（りょうげ）のみでよいであろうか。

仏教の信仰は本来、如来への道である。如来とは「世の尊敬に値いする」道に生き精進するものなのでなくてはならぬのである。

これでもいいのかという反省とおそれに私はおののく思ひである。

生きてゐる寺院は、末法的将来に向つてどうあつ

たらよいか―これが寺院を活かす道である。果して生きのびれるであろうかという不安と懷疑をもちながら、その生命をのばそうとすることは医術的思考であり、活かす努力なのである。

京浜教研会議第一分科会では、「寺は今のままでよいか」という基点に立つて寺を活かす道を探る模索であつた。そして、「魅力ある寺」が思求された。それはそれなりに貴重な時間であつたと私は評価している。しかし、全体の空気は懷疑と不安のためいきであつた。私はその末席に、腕を組み、目をつむり、もだえる思ひでいた。

そこで在るべき寺というものを、あらためて、やりたいという願ひをもつ私の考えを人、施設、事業、運営の四面から、整理してみた。勿論、私独自の考えではなく、誰でも考えている問題を、配列したものにすぎない。

法は人によつてとうとしと祖師は言われているが、法という字義は「教法」的な法として存在するものという意味もある。

このことを寺に当てはめると、寺は人によつてとらうとしと考えて誤りではない。

現在の寺院住職は、在俗から出家得道した人よりも、寺の子供が多いであろう。私自身も寺の子である。幼少時代からのしつけによつて仏法は毛穴から薫習されたであろうが、信仰を得て、得道したわけではない。

長じて学習が進むとともに、心に湧くものは懷疑のみであつた。ようやく信仰への心の窓に光がさしたのは、進退きわまつた苦境の嵐の中に全身全霊をたたき込まれたことによるものであつた。瀕死の病苦、空襲下の火の海、人間抹殺の獄中生活の思い出は今でも身の毛がよだつようである。

自分が自分でどうしようもない世界の中で自分をどうしたら活かすことが出来るか―そこに信仰の光がさし込んだのであつた。

寺もまた人の住む所であり、宗教は人間の心情的な営みである。寺に住む人、住職という人はどうあるべきか、「世の尊敬に値する」人間であろうか。人間としてのそのような自画像を確立しなければなら

ない。

その人が営む家庭は、社会に對して、モデルホームでなくてはお話にならないと思う。

〇〇寺といつても、具体的には〇〇と姓を名のる「家」である。お寺の「家」は、和楽の場でありたい。地域社会の、よき家庭としてのお手本でありたいと思ふのである。

人としての住職は、求道の人でなくては、資格その失である。求道精進は菩薩への道である。

法華經とともに生きようとする不退の精進、眞実に生きようとはげみ怠墮との闘いか根本的心情でなくては、僧侶であつても宗教家ではない。

住職はまた、その寺の地域社会における何らかの指導者でありたい。徒らに地位や名誉を求める「求名」の徒であつてはならないが。

住職は更に「布施を受けるに値する」きびしい反省を通して「法施」の人でありたい。法施は具体的には、布教伝道の人なのである。法施なき僧侶は「我遣化四衆 比丘比丘尼 及清信士女 供養於法師 引導衆生 集之全聽法」を身に読まないのである。

それは必ずしも学僧であることではなく、法華經的信仰に生きぬくことなのであると思う。

私は今年、河上肇（一八七九—一九四六）のことについて、やや研究をすすめたが、彼の「獄中贅言」の中の言葉に心をきびしく打たれるものがあつた。

「僧侶の子に生まれ、寺に育つたために、ついでに、ついでに坊主になり、お経を読むようになったという人たちよりも、当時の私はもつと自発的に、もつと本気になつて、全心を宗教的熱情の炉火中に投じ去つたものである」と。

僧侶は終生、求道とその精進に苦闘する旅人なのである。常に新たなる求道の旅に人生を創造する誓願に生きたいものである。

魅力ある寺は、そこに住む人の魅力に通ずることと思う。歴史的伝説の物語りの魅力をもつ寺、建設物としての造形的魅力をもつ寺もある。

それは京都、奈良等に見られる観光的魅力なのである。しかし一般寺院では求め得べくもない。では一般的にいかにして魅力ある寺として、その存在を

意義づけることができるであろうか。

なんとしてもまず人間関係を尊重することである。このことは、寺院が話し合いの場としてあたたかな場となるのである。愚痴苦勞ばなしからはじまり、人生相談であろうと、教育相談、信仰相談であろうとその内容は多岐にわたるであろうが、住職は勿論寺庭婦人ともどもに親しく語り合える人、秘密を守る安心な話し相手でありたい。寺院存在の機能は、まず人間関係の育成にあるといわざるを得ない。

第二に、寺院は情緒的安定を与える場ではなくてはならない。それは本堂、莊嚴な庫裡の静けさ、清潔さを充分答え得る外的条件である。それに加えて人間的なあたたかさが求められるのである。なにげないスマイルがお互いの心をやわらげることが毎日経験するところである。一ぱいのお茶の接待もまた情緒の安定に力を添えることを忘れてはならない。人を迎える心がまえ、人を送る作法の中に「一期一会」の深い心づかいが、接する人々に魅力ある安らぎを与えるものである。

第三に、にぎやかな寺でありたい。寄るところへこ

むと言われるが、寺は寄るところふくらむのである。自我偈の中に「衆生所遊樂」と表現されているが、仏の住むところはかくありたい。寺に来る人は参詣者のみではない。色々な社会の交流の中に、用件繁多な中に、人の心を明るくひらいていく住職家人でありたいと思う。

坊主にくけりヤケサまでにくいの逆はまた真である。つまり坊主かわいきヤケサまでかわいということに通ずるものと思う。

檀信徒のみならず、いかにもして大衆と結びついていく道を開くことは、大衆との接心であり、その接点を多角的に求めたい。天理教で、「にいかけ」を布教の重点においていることは範とすべきであろう。

生きている寺を活きる寺に展開することは、住職がいかに、その寺を「衆生所遊樂」の場たらしめるかの解決と実践に期待されるのである。

ここに寺の社会性への開眼があり、その施設、事業、運営のすこやかな発展があると思われるのである。

## 本の紹介

恩の構造——遠忌教師資料

教務部刊：現宗研編

現代宗教研究第10号抜刷

現代宗教研究 第11号

教化研究会議十年の歩み

報恩と教科／檀林資料

日蓮聖人——久遠の唱導師

岡元鍊成著・法華ジャーナル

四五〇〇円

日蓮教団の思想家

中濃教篤編・国書刊行会

二三〇〇円

三刷  
現代語訳 日蓮聖人の手紙 1・2

石川康明著・国書刊行会

揃三〇〇〇円